◆かっぱ民話シリーズ⑭◆

かっぱのなみだ②

作:近藤せいけん

太郎は縁側に座った。ちょうどそこへ、この家の娘のゆうが、縁側にほしてある、
川魚の干し物を取りに来た。
「　あんれぇ～あんたはだれじゃ」　「ここらで、見かけぬ顔じゃが・」
「そこで、何をしているのじゃ？」
「おかぁ～　だれかお客様じゃぞ」
あわてて、奥から、この家のおかみさんのしげが顔を出した。
「あれまぁ、おまえ様は誰じゃ、どこの村の者じゃ」
「　どこから来たのじゃ？」
大きな声を聞きつけて、この家の主人のどん平も息子のりゅうをつれて、やって来た。　た。
「　おかあ、どうした。何があったんだ」
どん平も、おかぁの指さすほうを見た。驚ろいた。
「　あれれ、れ、おまえは誰じゃ。どこから来た？」「どこの村の者じゃ？」
どん平も、しげ、ゆう、りゅう、初めてみる顔をまじまじとながめていた。
人間になったかっぱ太郎は、汚れた穴の空いた着物に、はだしでおもらいさんのよ
うに見えた。しかし、顔はきんせいがとれ、堂々とした体格、澄んだ目、どこをと
っても、初々しい若者であった。
「おまえの名は何という・・どこの者じゃ？」
立ち上がった、太郎がよく聞き取れない声で言った。
「太郎」
「おまえは太郎というのかえ・・・」
太郎はうなずいた。
「それでどこから来た？」
太郎は相模川のほうを指さした。
「そうか、川むこうの村からきたのか」
どん平は川向こうの村から来た若者と思っていた。
「それで、ここに何しに来たのか？」
太郎は何も答えなかった。しばし沈黙が続ずいた。
「おまえさま、もしかして、よく言葉がしゃべれないと、ちがうか・・・」
と、しげが聞いた。

太郎が軽くうなずいた。
「そうか、無理してしゃべれなくともいいょ」
「言葉が解ったらうなずくか、身振りして答えな」と優しく、しげが話した。
「おまえさま、お腹がすいているんじゃないか」
太郎はうなずいた。
「ゆう、この人にふかしたお芋と麦めしと焼き魚を持ってきておあげ」「はぁい〜」
ゆうは食事の仕度にむかった。
「りゅ、早く膳のしたくをしなさい」
「さあ、さ〜おあがり、おあがり、膳についたり、ついたり」
しげに促されて台所にあがり、膳の前に座らされた。太郎は膳につくのも初めてであり、物珍しそうにながめ、膳や器にさわったりし、不思議そうにながめていた。
りゅは太郎のようすをみて、面白そうに笑っていた。
太郎はおいもを、手にとって珍しそうにながめ、口にもっていった。
「むしゃ、むしゃ、」ととてもおいしそうに食べ、ざる一杯のおいもを、おしつに残っていた麦めしも、焼き魚も「あっ〜」というまに、たいらげた。
みごな食いぷりであった。
しげ「よっぽど、お腹がすいていたのね」
どん平も「すごいね、見事だね。あっぱれ、あっぱれ」
ゆう「そんなに急いで食べて、身体に悪いは・・」
りゅ「　はしの持ちかたもすごく変わっている。おもしろい、おもしろい」
しげ「　ところで、太郎さん、おまえさまはこれからどこえ行くつもりかえ」
どん平「　ゆくあてが無いのなら、少し、ここにいたらどうじゃ」
「　これから、相模川の漁をいそがしくなる、おまえの身体は強そう見える。わしの手つだいをして、それから考えたらどうじゃ」
りゅ「そうしたら、そうしたら、それがいい、それがいい、」
しげ「　そうされたら、おまえさまのためになるなら」
ゆう「　そうじゃねぇ、おまえさまは、言葉も不自由しておいでじゃ。ここで練習して、それから何でもおやりになったらいい」
太郎はうなずいて、頭を下げた。

「さぁ、そうと決まったら、ゆう、りゅう、納屋をかたずけなさい」
「　寝床を作ってあげなさい。古着をもってきなさい」
「さぁ、そこの井戸にいって、身体をあらいなさい。着古した野良着じゃが、洗
ってある、着替えなさい」
家族みんなが、太郎のために忙しく立ち回り、太郎の人間になった一日が終わろう
としていた。翌日、早朝から起き、納屋から元家のほうえ歩いていった。
農家の朝、早く。すでに家族全員起きて、おのおのの仕事をしていた。
太郎が頭を下げた。
ゆう「　太郎さん、起きたら、あいさつをするのよ」
　　「　おはようございます。て、言って、頭を下げるのょ」
　　「　さぁ、言ってみて」
太郎「　おはよう・・おはようございます」
ゆう「　そうよ、そうやって少しづつ、練習するといいわ」
　　「私が教えてあげる」
りゅう「おれも教えてあげる」
しげ「さぁ、朝ごはんょ、生たまごとなっとう、それにお漬物よ」
りゅう「なんだ、いつもと変わらないじゃないか」
ゆう「あたりまえでしょ、食べられるだけ、幸せなのょ」
どん平「あはは、は、そうじゃ、そうじゃ」
いつもの一日が始まった。
今日は相模川で、あゆ漁を行なう日であった。
「さあ、太郎。あゆ漁に行くぞ。おれの後をついて来い」
二人はすげ笠をかぶり、投網を肩にかけて、相模川に向かった。
川に着いて、どん平が投網を投げて見せた。太郎はじっと見ていた。
どん平が何回も投げてもあゆは入っていなかった。
どん平は投網の投げ方を太郎に教えた。最初はなかなか出来なかったが、少しづつ
網が広く広がるようになってきた。
どん平は何回も投げたが、あゆは一ぴきも入っていなかった。
太郎はどん平に指さして、場所を変えた。

(3へつづく）